

明治期キリスト教界指導者たちの家族形成

森岡清美

一、はじめに

別稿「明治前期における土族とキリスト教」(森岡2004)において、大名家大イエの崩壊に因り複合剥奪状態に陥って深刻な不安を抱えた土族の若者たちが、脱剥奪のための就学途上キリスト教に出会い、キリスト教入信によって不安に対処すると共に、脱剥奪、とくに価値的および共同体的脱剥奪を遂げたことを実証したのであるが、キリスト教入信は脱剥奪の一つのコースであったばかりでなく、おそらくより以上に、新しい価値の追求と新しい価値を担う共同体の創成といった積極的な意義をもっていた。別稿はこの積極面に力点を置かなかったので、本稿ではここに重点

を置いた考察を試み、全体として別稿の標題についての偏りの少ない論考を達成することを目指したい。

新しい価値を担う共同体とはまずはキリスト教会のことである。教会は既存の共同体から切断された明文の規則をもつ任意の誓約集団として、日本における集団類型の社会史からも注目すべき現象であったが、ここではキリスト信徒たち、とくに教界の指導者となった人々の家族に注目する。新しい価値を担う家族の特色はまず配偶者選択に現れ、夫婦関係・親子関係に現れ、さらに新しい観念を懐く夫婦と伝統的観念をもつ親との関係に現れると考えられるので、集団の含意の濃い家族よりは、生成過程の含蓄をもつ家族形成の概念を選好して、これを標題に掲げた。

明治期キリスト教界指導者たちというのは、別稿で取り

上げた六人を指すのであるが、そのうち本多庸一はキリスト教に接触する以前の一八六九年に結婚し、押川方義は少年期に他家の養嗣子となって一八六八年家付娘と結婚したことで、兩人ともに家族関係の内容を窺わせる資料がきわめて乏しいため、本稿の考察から除く。残りの四人については、井深梶之助、植村正久、海老名弾正、小崎弘道の順に取り上げる。

本稿は別稿（森岡2004）の補論であるので、問題の背景、考察の枠組、上記四人の経歴等の解説はそれに譲る。

二、井深梶之助（一八五四—一九四〇）

配偶者選択

ブラウン塾在学中の井深は、一八七五年（明治八）かそれより少し以前、したがって二〇歳になったかならぬ時期に、突然国許会津の父から書面が届いて、今回某氏の長女を嫁に貰うことにとりきめたからさよう心得るように、と宣告された。某氏というのは、旧会津藩家老の家柄であったばかりでなく、父とは親友の間柄であり、維新後も会津若松に邸宅を保有して比較的安楽な生活をしていたので、

父母はこれに優る良縁はないものと確信して婚約を締結し、井深家の戸籍に入籍の手続きをすませた後、喜色満面の本人を思い描く親心から梶之助に申し聞かせたのであった。

当時、父母が子のために妻を選定して婚約を取り結ぶのは当たり前で、子は否やを言わず有難くその指示に承服するものとされたが、梶之助は熟考のうえ断然これを拒絶するとともに、理由を細かに認めて父に陳情した。その結果、結婚の根本観念について父子の間に新旧の甚だしい相違のあることが明白になったことはいうまでもない。親の側としては、かりにも父が貰うと約束したものを子が貰わぬという道理はないと主張し、とにかく一旦貰ったうえで、もし気に入らなければ離縁することは任意である、という譲歩案を示したが、梶之助は、それでは先方に対してかえって無礼であり、また本人に無情な仕打ちとなることを、縷々弁じて了解を求めた。

拒絶は相手方本人についての不満からでなく、梶之助が抱懐する配偶者選択の原則に照らして拒否する他なかったのである。それは次の三カ条にまとめられている。

第一 一面識もない全然未知の人を終生禍福を共にす

べき配偶者とすることは、たとえ第三者の立場から見ていかに良縁であろうとも、当事者たる自分としては絶対に不服である。

第二 自分の配偶者は新時代相当の種類および程度の教育ある女子たるを要する。

第三 自分はすでにキリスト信者であるから、配偶者もまたキリスト教の信者であることが必要である。

この原則からいって、天下りの結婚命令は絶対に拒絶しなければならないが、それでは父の面目は丸つぶれとなり、また先方に対して礼を失することにもなりかねないので、梶之助は一つの妥協案を提出した。もし自分の拒絶にかかわらずこの縁談を成立させたい希望であるなら、その女子を横浜の女学校に入学させ、三年から五年の修行を積ませたなら、学業成績も判り、信仰もいずれにかほぼ定まるであろう。その上で縁組の成否を決めることにしてはどうかという提案であった。

梶之助のような考え方は、当時の士族階級ではもつての外の不心得、いわば危険思想であり、明らかな親不孝と見なされたと推測されるが、双方の父は梶之助の主張にも一

理ありと認めたらしく、その娘は横浜山手のフェリス女学校に入学することとなり、一人だけでは淋しかるうというので、梶之助の妹も一緒に上京して、彼の学資援助で同じ女学校に入学することとなった。一八七七年（明治一〇）の夏のことである。この娘は二、三年在学して信仰を起こし洗礼も受けたが、国許の家庭の都合で卒業せずに退学帰郷し、梶之助との縁談もそのまま不成立に終わったという
『井深梶之助 1969:86-88, 102』

井深の主張は今日からみれば当然のこと、当人の選好を考慮しない独断的高圧的な父の処置こそ咎められるべきものであるが、当時はこれが行き届いた親心の発露とみなされたのである。それであるから、子の拒否は親を驚かせ不興を招くことは必然であり、それを予想して拒否する子は苦しみ悩んだ。にもかかわらず井深が現代の配偶者選択の要件に合致する信念をもち、かつ最後までこれを貫徹することができたのは、二つの要因があったとみることができる。

一つは、聖書が説き宣教師が語るキリスト教的結婚観であり、宣教師の同志的同伴的な夫妻関係がこれに肉付けして、英語塾の生徒たちを納得させた。彼らは親たちの夫婦

関係とは異なる夫婦の新しい在り方を、遠からぬ自分たちの結婚のモデルとしたのである。その場合、井深の三原則の第一はすべての前提であつた。

もう一つは、井深の三原則の第二・第三は決して絵に描いた餅でなく、達成可能な目標であつたことである。それにはつぎのような事情があつた。

アメリカ・オランダ改革派教会宣教師 S・R・ブラウンが一八七三年（明治六）横浜山手二一番の自宅に私塾を開き、井深は翌七四年から彼の学僕兼従僕取締としてここに身をよせた。たまたまアメリカ婦人一致外国伝道協会派遣の女性宣教師たちが創立した女学校（後の横浜共立女学校）が、校舎手狭のため七二年に山手二二番のブラウン塾隣接地に移転していた。井深たちブラウン塾の生徒が通う横浜海岸教会（日本基督公会）の朝の礼拝は例の石の小会堂でなされたが、夕方の祈禱会は共立女学校の小礼拝堂で行われた。ブラウン塾の男子生徒たちは寄宿舎住まいの女学生と共に、祈禱会の開会前に同校教師 I・H・ピアソンのオルガン伴奏によつて讃美歌の練習をした。このお蔭で初代信徒の若者たちが曲がりなりにも讃美歌を歌うことを覚えたのであるが、彼らはまた、英語で教育されキリス

ト教の信仰を培われつつある若い女性を間近に見ることができた「井深樞之助 1888」。海岸教会での井深の後輩山本秀煌（一八五七—一九四三）は、共立女学校の草創期を回想して以下のように言っている。

明治七年から明治一〇年までの間に、在学しておられた女生徒方の中私の覚えている方々は、前記の西田けい子、北川春子の二氏の外、皿城久子（三浦夫人）、鈴木信子、水上せき子（井深夫人）、小山さえ子（栗村夫人）、木脇園子姉妹、玉生きん子姉妹の方々である。これらの方々は殆ど皆八、九歳、または一一、二歳の頃から入塾されていて朝夕西洋の女教師等と起居を共にし、英書を読み、英語を話して居られたので、後には、英語や英文学には、殊に堪能になられて、教育等に貢献することが多かつた。「井深樞之助 1888」

当時の女生徒のなかに後に井深夫人となつた水上せき子の名が見出されるとはいえ、このことを現代風に深読みして、ブラウン塾の男子生徒と共立女学校の生徒の間に意味のある接触があつたと推断してはならないが、井深が三原

則を掲げた時に彼女を漠然と念頭に置いたのかもかもしれない、少なくともこうした新しい若い女性の集合像ゆえに、原則第二と第三を実現可能な目標になしたのであり、だからこそ井深が親の願いに反する行動をあえて貫徹できたと考えうるのではないだろうか。

妻せき子（一八五九 九八）

井深は一八八〇年（明治一三）四月、元幕臣水上嘯月の未婚せき子と結婚した。会津藩士の子と幕臣の娘との取り合わせであったことが、婚約を容易にした一因であるように推測される以外、結婚に至る過程についてこれを窺わせる文献に接しない。そこで彼女の経歴のみ示せばつぎの通りである。水上氏は代々旗本の土として江戸巢鴨に居住し、一八五九年（安政六）せき子もそこで生まれた。幕府の倒壊により主家に従って駿河に移住したが、一八七二年一家は東京に出、翌年せき子だけ横浜税関の官員となった義兄に伴われて横浜に移り、共立女学校に入学した。以後、父の都合で東京に帰るまでの約二年間、同校にて婦人宣教師から英語を学ぶとともにキリスト教の話を聴き、宣教師J・バラより受洗して横浜海岸教会に所属した。ちょうど

この時期に、井深は共立女学校に隣接するブラウン邸に寄寓していた。のみならず彼も海岸教会に属して共立女学校の小礼拝堂での夕べの祈禱会に列し、女学生とともに讃美歌の練習に加わったのであるから、せき子を個人的にそれと識別していたかもしれない。すでに前段で言及したように、新しい教育を受けた若い男女の社交圏の芽が、米人宣教師の保護下でふくらみ初めていることは注目に値しよう。

東京に帰ったせき子は、文部省が新設した竹橋女学校に入学して英学ならびに和漢学を修め、「學術優等」にして常に最高級の首座を占む「井深樞之助（せいのすけのすけ）」と伝えられる成績を挙げた。同女学校廃止の後、父母のもとで家政を助けていたが、前記のように一八八〇年結婚の約整い、同年四月井深に嫁した。井深二六歳、せき子二一歳であった。新婚当時井深は東京麹町教会の牧師で、せき子は牧師夫人としてスタートする。翌八一年彼は東京一致神学校助教に招聘されて牧師を辞し、やがて一致神学校の後身明治学院の柱石となって、九一年には総理に選出された。その頃一〇年ほどの結婚生活をへて、せき子は二男三女の母となっていた。

井深が九〇年に明治学院副総理を一旦辞して、ニュー

ヨークのユニオン神学校に学ぶため横浜を出帆した時には、せき子は身重で、その年一二月に生んだ次男が末子となった。九七年学生基督教青年会万国同盟会の大会に日本代表として出席するべく、井深が第二回の訪米の旅に上った後、せき子は持病のリウマチに悩まされた。留守宅のせき子に宛てた井深の手紙が六月と七月の二ヵ月だけで八通残されているが、その中で、「御身も梅雨にてリウマチスの由、折角御加養可被成候」「御身のリウマチス是如何に候哉」と妻の健康を案じ、万国学生大会の模様を詳しく報じた中で、演説の成功をつぎのように伝えている。

自分事は、一回はラウンド・トップ、一回はオーデトリウム（大会堂）にて、前後二回演説致申候。自分で申すは所謂手前味噌の様なれども、二回共かなり成功の考えに御座候。独逸人、和蘭人、仏国人、ノルウェー人、スイス人、メキシコ人、チリー人、印度人、支那人、其の他諸国の代表者等孰れも英語の演説を致し候得共、孰れも余り上出来には無之候。去る（七月）二日の晩には、米國獨立の祝会有之、非常の盛會なりしが、其の時の演説は殊に大喝采を博申候。其れ

よりして、手帳又は聖書に、ドウゾ貴君の姓名を書して呉れ呉れと迫られてホトホト困り入り候位に御座候。先ず先ず是れ迄は余り不首尾は無之方に御座候間、御安心被下度候。委敷くは其の中福音新報及び国民新聞へ通信致候人有之候筈に御座候間、尚他人の評判を御覽可被成候。〔井深槐之助 1970:422〕

恩師ブラウンに鍛え抜かれた英語の語学力による、本場での英語演説の成功は、とりもなおさず大会出席の成功であるが、そのことを率直に報じて妻と喜悅を分つと共に彼女を安堵させ、それによつて自らもまた悦ぶ井深の夫婦関係の一端がここに顯われている。自ら英語で意思の疎通ができ、英語による国際交流のさまざまな場面を思い描くことのできる妻にして、始めて夫の演説の成功を実感できたと考えれば、かつて若い井深が掲げた配偶者選択の第二、第三の原則も、実はこのような関係を創るための要件であったということがきよう。この外、井深は米國訪問中の興味深い見聞をこと細かくせき子に報じて、楽しい経験を妻と分つとしたことにも、当時の日本人には珍しい同僚型の夫婦関係を窺うことができる。

一八九八年三月上旬からせき子は持病のリウマチに苦しんだ。東洋内科病院を設立して名医の評判の高いキリスト信徒・高田畊安（一八六一—一九四五）の治療を受けていたが、二〇日急性心内膜炎を起こして病勢俄かに革まった。危篤の枕辺に駆けつけた近親にもれなく遺言すると共に一々永別を告げ、キリストの救いを確信し四〇歳に満たぬ身ながら泰然として大往生を遂げた一部始終は、井深の哀切極まりない日記に詳しい〔井深梶之助 1970:414-416〕。

三、植村正久（一八五八—一九二五）

婚約と交際

井深の場合は婚約から結婚まで二、三カ月しかなかったから、婚約以前の潜在的な配偶者選択期間に重点を置いて述べたが、植村は婚約から結婚まで三年余の歳月を要したことを考慮して、婚約期間の交際について述べよう。もちろん、利用可能な資料の分布に制約されていることである。

一八七九年（明治一二）植村二一歳の春、当時横浜フェリス女学校で研学中であった山内季野に、麹町教会牧師奥野昌綱（一八三三—一九一〇）を介して結婚を申し込み、即

座に快諾をえた。しかし、結婚にこぎつけたのは八二年夏のことであった。

フェリス女学校は、一八六九年（明治二）八月に来日したアメリカ・オランダ改革派教会の婦人宣教師 M・E・キダーが、J・C・ヘボン夫人経営の共学塾を引き継いで女学校として発展させ、横浜山手一七八番に校舎と寄宿舎を建てて七五年（明治八）六月フェリス・セミナリーとして開校した学校である。参考までに付言すれば、校長キダー（ミロル夫人）が S・R・ブラウンに伴われて来日した特別の関係により、前節の井深はおそらく恩師ブラウンの推薦で縁組の交渉のあった某家の娘を就学させたばかりか、その学友として自分の妹を無月謝で修学させてもらっていた〔井深梶之助 1963:102〕。

さて、山内季野は紀州日高郡南部の有力な酒造家の娘で一八五八年（安政五）生まれ、男ものの袴をはいて和歌山へ出て、男子に伍して漢学塾に学んだ。いかなる手づるにてか横浜に赴き、フェリス女学校で午後漢学教師として勤めながら、午前は普通学と英語学等の生徒となって勉学し、七七年には横浜海岸教会で J・バラから洗礼を受けている。他方植村は、バラ塾、ブラウン塾をへて東京一致神学校に

学び、七八年日本基督一致教会の教師試補の資格をえて東京下谷で開拓伝道を展開し、教会創立を目指して奮闘中であつた。ブラウン塾の同窓で共に上州伝道に赴いたことのある雨森信成（一八五八—一九〇六）が、フェリス女学校の日本人教師のなかにいたから、才媛山内嬢の風評はしばしば耳にしたはずだし、横浜海岸教会の会衆のなかで互いに遠望し、時には近くで会釈することさえあつたかもしれない。植村が季野に宛てた最初の手紙に「僕久シク君ガ人ト為リヲ見聞スルニ」の語があるように、兩人はおそらくお互いの、見聞の範囲に属していた。しかし、結婚の申し込みにには仲介を立てたのである。

二一歳の植村が仲介を依頼した奥野昌綱は老成した五六歳の旧幕臣で、横浜海岸教会の会員歴でも日本基督一致教会の教職歴でも植村の先輩であつた。奥野はまた季野の友人の父親であつた。フェリス女学校での季野の同僚に奥野の次女がいたのである。このような願つてもない仲立ちによつて結婚を申し込み、即座に快諾を得ながら結婚まで三年余の歳月を要したのは、彼女の実家の許可をえる交渉が容易なものでなかつたことを物語っている。季野がその予想を文に認めて仲介の奥野に託し、植村は直ちにこれに応

信したので、われわれは図らずも信書によつて彼らの結婚への展望を窺うことができるのである。植村が季野に送つたこの第一信を、長文の煩を厭わず紹介しておこう。

拝呈 陳者今日吾ガ邦ノ情態ニテハ男女書信ヲ贈答スル等ノコトハ頗ル世人ノ忌疑ニ触ル、所ナルニ直接ニ斯ル書ヲ呈スルハ甚ダ心ナキ次第第二有之候得共御愛心ニヨリ御海容被下度候 僕久シク君ガ人ト為リヲ見聞スルニ其敬虔氣節才学共ニ衆ニ超ヘ群ニ秀デテ深ク渴慕スルニ堪タリ 生ガ婚姻ノ義ヲ君ニ申入レント欲スル一日ニ非ズトイヘトモ其便宜ヲ得ズ 空シク遷延今日ニ至レリ 然ルニ頃日奥野君ヲ以テ敢テ貴意ヲ問合セタルニ君ハ忽チ御承諾アリシヲ以テ平生ノ素懷ヲ果セリト悦喜致シ居リ候 然ル所何ゾ図ラン 父兄ノ許諾ヲ得ルマデ猶予云々ノ貴書ヲ得ルニ至リ 初メハ驚愕失望ヲ極メタレド篤ト熟考致シ候得バ 君ノ用意懇到 誠実ニシテ敬服ス可キモノアルヲ見出シ 余ガ判定ノ錯ラズシテ実トニ君ガ君子好速タルヤ益明力ナリ加フルニ昨日奥野氏ニ面会ノ折氏ニ語ラレシ所ヲ聞キ彼ニ与フルノ書ヲ一読スルニ及ンデ真実ノ情 言語文

章ノ上ニ溢レ 藹然トシテ掬ス可キナリ 生モ亦一丈夫ナリ 此上ハ亜伯拉 以撒ノ神ニ祈リテ 君ガ父兄ノ許諾ヲ得ルノ日ヲ待タン而已 生ハ決シテ急速ヲ要セザルナリ 思フニ凡ソ幸福ナルモノハ平坦ノ路ニ由リテ達シ得ベキニ非ズ 必ラズヤ多少ノ障礙ニ遇ハザルヲ得ズ 何ゾ独リ我々ノコトニ於テノミ然ラザルノ理アラシヤ モシ上帝ノ意旨ニ適ヘルコトナランニ縱令千萬ノ妨碍アリトイヘドモ 終ニ成ル可シ 視ヨ霜雪ヲ經過セル梅花ハ馥郁トシテ異香アルニアラズヤ 人生万事皆是ノ如シ 迂生驚鈍狂愚ナリトイヘドモ願フ所ハ民間ニ在リテ官途ニ就カズ 畢生福音ノ広播ニ従事シ 有益ナル文事著述ノ業ニ尽力シ 聊力以テ天父適格ノ洪恩ニ答ヘ奉ラントスルニ在リ 冀ハクハ上帝ノ意旨ニ適シ君ガ補佐ヲ得テ以テ此志望ヲ成スニ至ラン事ヲ 是偏ニ上帝ニ祈ルトコロナリ 若シ弟ガ庸劣浅陋ナルヲ棄ルナクバ 君モ亦之ヲ天父に哀願セヨ 書余多シトイヘドモ今茲ニ尽ス能ハズ 蕪文惠筆ヲ咄ムルナクバ幸甚 頓首

四月二十三日

植村正久

山内季子女史

二白 願クハ此書狀御披見ノ上速力ニ御返翰ヲ賜リタシ 且此等ノ事ニ付キ迂生ニ商ラント欲スルコトアルトキ其他時ニ書信ヲ通ゼヨ 余ハ基督ニ在ル兄弟トシテ喜ンデ之ヲ受ケ亦喜ンデ肝胆ヲ吐露ス可シ 君ハ余ガ知己ナリ 余ハ亦君ノ知己ナリト自ラ信ズルナリ 仮令到底父兄ノ許諾ヲ受クルコト能ハズ永ク結婚ノ喜ニ遇ヒ難キモ我々ガ隔心ナク交際スルモ何ノ妨カ之アラン 貴書ヲ賜ハラントナラバ左ノ所ニ宛テ御投函下サレタシ

東京下谷区練堀町拾四番地

〔植村 1934.11.3-11.4〕

植村は季野に結婚を申しこんだ経緯と彼女の快諾をえた喜悅を率直に表明した後、彼畢生の志望を力強く語って、彼女の補佐をえてこの志望を達成したいと心底を吐露したばかりでなく、父兄の許諾をえるまで、世人の忌疑を恐れず書信によって隔心なく交際することを提案した。季野は胸が震える思いでこの手紙を読んだに違いない。時代の最先端をゆく教養を身につけ、新しい信仰を抱懷する若い男女が、ここに平坦ならざる生涯を共にする門出に立ったの

である。

季野の実家山内家は代々神職を勤めたこともあって、キリスト教牧師との結婚に同意できるわけはなかったが、二年四月和歌山県下を布教していたカンパランド長老教会の宣教師 J・B・ヘールを自宅に招いた時の妹たちの対応を転機として、急速に許諾に傾いたようである〔佐波 1933:75〕。そして同年八月、植村が牧する下谷教会会堂でフェリス女学校創始者キダーの夫宣教師 E・R・ミロルの司式のもと、晴れて彼らの結婚式が執り行われた。英文の結婚証書をミロルが作成し、これに兩人が自署し、かつ媒介人奥野昌綱と下谷教会長老宮部文臣（一八五二—一九二九）が証人として署名した。

植村は季野宛て第一信で表明した志望どおりの人生を送り〔森岡 2007〕、季野は彼の願いに応える生涯を送ったことは、つぎに述べるとおりである。

妻季野（一八五八—一九三〇）

植村は伝道者の常として切り詰めた不如意な生活をしてきたが、そこに地方豪家の娘が家からの仕送りを全く断つて飛び込んでいったのである。しかも幼少の頃から植村が

敬愛してやまなかった母は男勝りの俗にいうしっかり者であつたのに対して、季野は学問に専念してきたインテリであつたから、姑との折り合いはむずかしく、母子密着のなかに割り込んだ形の季野は辛かった。親たちは数年前に受洗してキリスト信徒になっていたものの、育った生活環境と生きざまの相違はいかんともしがたかった。結婚して四カ月ほどたった年末の日記に植村は、

凡そ婦を娶らんと欲するもの、若し娶つて後父母と同居する能はざるを知らば、必ず娶らざるに如かず。娶りて後父母と同居せんと欲するは愚且罪なりと謂はざる可らず。吾が今日の形況憂てもなほ余あり。

と深い憂慮の念を綴り、他方季野はその頃、

思いきや花の都に入りしより おどろおどろの憂きを刈るとは

と紙片に書きつけて、期待外れの結婚生活を嘆いた。そして結婚後半年ほどで紀州の実家に帰ってしまう。あれほど

反対され許諾をもぎとるようにして結婚したその結果がこのままであれば、離婚を覚悟しての里帰りであつたかもしれない。しかし、実家は税金にからんで敗訴の憂き目をみ、昨日の名家も今まさに没落しようとしていた。植村は綿々たる情愛を託した一篇の長歌を南紀の妻に送り、さらに自らかの地に赴いて彼女を東京に伴い帰り、親たちと別居することによって、からくも危機を乗り越えた「佐波 1937-695-696」。

季野は八三年に長女を、八六年に次女を生んだ。植村は八七年に一番町教会を設立し、翌八八年米国に渡り、ついで暫くロンドンに滞在した。この外遊の間、家族を養うために季野は明治女学校で漢文を教え、夫の依頼に応じて苦しいなかから送金さえしている。

自力で家計を支えるために外に出て働く季野は、銀杏返しに靴ばきという姿で教壇に立つた。学校の文学会などでは自らも演説し、秋花の雅号で雑誌などによく文章を載せた。自宅でも時々編物や子供服の裁ち方の集まりなど、しばしば昔に戻った心地で澁刺と忙しく暮らした。しかし、植村が帰朝すると季野は学校を辞めて家庭の人となり、その後全く夫の背後に隠れて彼の縦横の活動を支えた。その

中で、九〇年に三女を生み、九四年に四女を生んだ。

植村は牧師として、『福音新報』『日本評論』の主筆として、また日本基督教会の指導者として幅広い活動をする、きわめて多忙な身であつた。季野は夫の事業に対して心から信頼し共鳴し、また夫の説教を聴いては、「今日の説教はまことによい説教であつた」と、溢れる感激を子どもたちにもらすのを常とした。このように夫を最も尊敬しながら他面欠点をよく知り、その短気な性格と辛辣な言葉によく耐えた「佐波 1943-91」。

季野の姪は、年中叱られてばかりいる叔母の意気地なさや歯がゆかった。この姪に季野はつぎのように語っている。主人が外から帰宅して何の理由もなくいきなり怒るので、何が何やらわからないで困ることがあるが、そんな時はいつも訪問先で不快な思いをして、言いたいことも言わずにこらえて帰ってきたのであろう、そして鬱憤晴らしに家の者に怒るのであろう、それなら私は怒られる的になろう、それで神の聖名を汚さずに牧師の務めを無事に果たしてもらえらなうと思ひ、感謝して怒られている、と「佐波 1943-91」。

娘たちにとって父母は、「一つの軛に連なつて畑を耕す

牛のように神の国につかえた」とみえ、また「母は父に在
つて生きている人のようであつたが、その実、父も母に在
つて生きていたのである」と言われ「植村 1866.6.20」、
「影の形に添ふ如く、彼ら夫婦は一枚の袷衣の表と裏のや
うなもの、離しては全うせられない、裏は目立たないが、
どうしても無くてならぬもの」佐波 1943.4.21」であつた。

井深の場合と同じように同伴型の夫婦関係であつたが、利
用可能な資料によつてその内実をみれば、福音の広宣とい
う高い志望を共にする同志的結合であり、しかも優れた教
界リーダーである夫を立てての夫唱婦随型であつたことが
明らかである。キリスト教信仰に支えられた同志的同伴型
という新しい夫婦関係の登場は、共同体の脱剝奪の域を超
えた価値の実現に繋がるものといえよう。

四、海老名弾正（一八五六—一九三七）

配偶者選択

海老名は一八八一年（明治一四）任地の群馬県安中から
出京して、新婚の旧友小崎弘道や婚約中の植村正久に会つ
た時、いくつかの結婚話が出たが、いずれも実るに至らな

かつた「渡瀬 1888.1.10」。同年一二月、危篤の父を介抱せん
がため再び安中を発つて郷里柳河に赴き、熊本をへて翌八
二年京阪神に戻つた際、熊本洋学校以来の盟友横井時雄
（一八五七—一九二七）と会つた。任地の愛媛県今治に帰る
横井の都合で神戸で同宿したところ、横井の妹みや子との
縁談が出たのである。

横井「妹は我々の仲間には到底六ヶ敷いかと思つた
こともあつたが、このごろは母も我々の仲間にくれ
るかも知れない。君どうじゃ。」

海老名「君の妹なら、人柄も大抵分つて居るし、血統
も分つて居るし、英語も出来るし、もらはれるなら
欲しいねえ。」

横井「家内と相談して家内から話させて見よう。」

海老名「それは誠によい話であるが、それなら僕は先
ず友人の了解を得たいのである。君の妹を欲しい人
は幾人もあつたさうだが、中にも僕の親友某は熱中
して居つたさうだが、失敗に了つたことは君の知る
通りだ。君が先日僕に告げたやうに、彼は既に優秀
な某女子を選定したさうだから、最早、何も遠慮は

いらなけれど、僕は友情を重んずるのだ。友情を傷けて候補者を定むることは、不本意千萬であるから、先ず彼と相談して、然る後改めて僕の方から君へ相談致さう。君の方に可能性があるかないか、君の細君を煩はして探つて戴くことは差支なからうと思ふ。宜しく御頼み申す。」

海老名は遠方にいた件の友人を訪問して、横井の妹とできれば結婚したい自分の意思を明かしたところ、君が貰つて呉れれば満足だとのこと。その後、親しい横井家の掛かりつけ医師ベレーの意見を聞いた。彼は言下に *Very good, she is mild, gentle, intelligent and beautiful.* と答え、ややあつて、彼女の健康は近頃良好で、懐妊さえしなければ心配はないと言う。海老名は聊か躊躇しなくてもなかつたが、最早騎虎の勢いというか後戻りはできない。横井に遅れること一カ月ほどで今治に着いた。

横井「家内の探知する所によれば、一寸六ヶ敷さうである。結婚の事は当分中止といつて居るさうだ。」

海老名「それなら、それでもよいが、君の妹は前年の

事を気にして居るかも知れない。何某は既に他の女子と婚約して居ることを知つて居るかどうか、又僕は彼に面会して了解を得て来たことは無論知らないだらうから、この二件を細君から話してもらひたい。而して改めて僕の意志を告げて貰ひたい。」

海老名が念のため彼女の健康状態について色々聞きただしてみると、よほど虚弱のようである。彼女は申し分のない女性であるが、虚弱體質のためわが献身の仕事が妨げられては、神に対しまだ亡父に対してすまない。そう思つて苦慮煩悶、食物の味を失い、数回絶食するに至つた。そこでつらつら省みるに、(視力の弱い海老名のために)主に読書で助力してもらいたいという、利用の立場から結婚を考えたい。しかし、健康な女性でも結婚後虚弱體質になるかもしれない、もし虚弱になつた時には必ずや大きな失望に陥るだらう。利用主義の大欠陥はここにある。健康もまた学才も必要であるが、婚姻の根本精神はもつとものと深いもの、永久に変らないもの、でなければならぬ。それは「Love」である。ここに夫婦の根本第一義がある。我果たして彼女を愛するかどうか。いかやうの境遇に出会つても、

変らない、動かない、薄らぐことのない愛があるかどうかである。婚姻の神聖な奥義がここに存し、また神の聖旨もここにあると合点した時、海老名は釈然たる心地になり、決心がついた。

ちょうどその時、横井は告げていう。妹の心は動いた、母もその気になっている、と。欣然としてこれを聞いた海老名は、横井の特別な紹介のもとに彼の母と妹に改めて挨拶し、後日を期して今治をあとにした。そして、当面の要務を処理した後、再度今治に來り、八二年一〇月今治教会で、おそらく横井牧師の司式によって結婚式を挙げ、一月早々、新婦を伴って安中に帰任した「渡瀬 1938.10.3-1961」。顔見知りの盟友の妹との、彼の媒介による結婚であったればこそ、縁談の始まりから僅か数カ月で結婚に漕ぎつけたのであろう。

妻みや子（一八六二—一九五二）

みや子の父は幕末の思想家、熊本藩士横井小楠（一八〇九—六九）、母つせ子は惣庄屋兼代官の矢島忠左衛門の娘、また竹崎茶堂妻順子と徳富一敬妻久子の妹、そして矢島楯子の姉であった。みや子は七五年熊本洋学校に例外的に入

学を許されてジェンズ夫人から英語を学んだが、七六年廃校になったので、東京開成学校に学んでいた兄横井時雄の手引きでか上京して築地海岸女学校に学び、さらに七七年兄が開成学校を中退して京都の同志社に転じるや、彼女も同志社女学校に転入し、信仰をえて新島襄（一八四三—九〇）から受洗した。そして八一年に卒業した後は、今治教会牧師の兄のもとに身を寄せていた。この略歴をみれば分かるように、みや子は熊本の名門に生まれ、当時の最高水準の教育を受けた女性であった。

海老名は九歳で実母を失い、彼を頼りにしていた父を前（八一）年一二月に亡くしたばかりであった。それ故、世上に愛すべきものなしと思ひ失望の果てに天国を望むようになっていたが、婚約後は世上にもパラダイスがあると思うようになり、一層永遠不壊のものに気が移ったと、人生観に変化が起きたことを八月一六日付けみや子宛て書簡で告白していた「渡瀬 1938.10.6」。

みや子をえて、世上にもパラダイスがあると思うようになった海老名の、彼女を伴って安中に帰任してからの伝道活動は、全くすさまじい勢いであった。その一切は安中教会の分析の別章に譲るとしても、海老名の獅子奮迅の活動

の背後にみや子があつたはずであるから、安中における彼女について語らなければならないのに、語りうる逸話が残されていない。それはおそらくつぎのような海老名の生活態度に由るものであろう。

基督が我よりも家族を愛するは叶はざる者なりと云ふ精神に基いて、一切を棄てると決心した。そしてちつと家内を見た。一面断腸の思があつたが、又何とも云はれないよい気持であつた。従つて近來迄、自分の出処進退に就いては、家内に相談をせなかつた。安中から前橋、前橋から熊本と諸教会に転じた時も、伝道会社社長となつた時も、神戸教会から東京、それより同志社に行く迄、家内に相談して決したのではない。何時も神に相談して決した。所がどうも近頃になつて考が變つて来て、家内を相談に加へてもよいと思ふやうになつた。家内も（神の）赤子であるから、除外は出来ない訳である。家内を相談に加へなかつたのは、アダムがエバにやられたからであるかも知れぬ。「海老名 1937.76」

みや子と結婚してから同志社総長として招かれるまでの約四〇年間、海老名は出処進退を決するさい一切妻に相談しなかつたと告白している。一八七六年（明治九）海老名が洋学校を卒業する間際の頃、みや子たち二名の少女が聴講しているのを見咎めた上級生の代表としてジェンズに抗議し、彼から諄々と説諭されて男女共学論者になつたという彼も「渡瀬さるる」家庭生活では夫婦別ありの儒教觀念を、ことによれば男尊女卑の武家氣質すら、容易に脱皮できなかったのかもしれない。それを、キリストよりも家族を愛する者はキリストに従う者としてふさわしくないという教えと、いつも祈りにおいて神と相談して決定する彼の信仰態度で正当化したとも考えられる。

海老名の場合、顔見知りの親友の妹との、親友の仲介による恋愛結婚であつたが、上引の限りでは同志的同伴型とは云いがたい。しかし、みや子は夫を助けて宣教に励むほか、叔母矢島楯子（一八三三—一九二五）の基督教婦人矯風会設立に協力し、一九〇九年に夫が創刊した『新女界』の編集に当り、一九年には米国ピッツバーグで開催された世界基督教徒大会で日本婦人代表として講演するなど、夫と共にスケールの大きい働きをしたことは事実である。やは

り、夫婦相携えて神に従うという一点において、在来の夫婦関係と決定的に異なっており、他方、井深や植村の場合と共通する新しい在り方であったことはいうまでもない。

余談であるが、井深の妻せき子は結婚後一年で長子を、そして一〇年後に末子を生み（計二男三女）、植村の妻季野は結婚後一年で長子を、そして一二年後に末子を生んだ（計四女）。これに対して、海老名の妻みや子は結婚後四年で漸く長子を生み、末子を生んだのが二三年も後のことであった（計二男二女）。出生パターンのこの大きな隔差にも一切を棄てる決心をして、断腸の思いながら家内も棄てたという海老名流の信仰一本の生活態度が、屈折して影を落としているのかもしれない。

五、小崎弘道（一八五六 一九三八）

配偶者選択

小崎の外孫岩村信二によれば、彼の結婚は、「典型的な見合結婚」だった「岩村『8822』」。「典型的な見合結婚」とは、見合で初めて知り合った男女の結婚という意味であろつ。当時の士族階級では親が決めた結婚が主流で、決めてくれ

る親や親族がない場合見合結婚となり、それがおおむね典型的な見合結婚になったのかどうか。われわれの知識はまだまだ不十分であるが、当面、小崎がどのような経緯で典型的な見合結婚に至ったのか、跡付けることから出発しなければならぬ。

小崎は七九年（明治一二）六月、海老名や横井と共に同志社神学科を卒業した後、上京して伝道に従事し、年末には京橋区新肴町に一個の教会（靈南坂教会の前身）を設立した。翌八〇年には井深・植村ら横浜バンド出身の教職や安中出身の湯浅治郎（一八五〇 一九三二）ら在京の信徒と東京基督教青年会を発会して、会長に挙げられるなど、早くも注目すべき活躍をした。青年会の有力会員の一人で同じ熊本バンド・同志社出身の岡田松生（一八五八 一九三九）が、津田仙（一八三七 一九〇九）設立の農学校・学農社で教鞭を執っていた関係からか、小崎は津田の知遇をえ、毎日曜日の夜、学農社に出かけて生徒のためにキリスト教の説教をしていた。津田は維新のさい幕軍に投じた元佐倉藩士で、七三年ウィーン万博に日本政府の農業部門担当員として出張し、七六年学農社を開設して新農法の紹介に努める一方、七四年アメリカ・メソジスト監督教会の宣教師か

ら受洗して、同教会婦人宣教師D・E・スクーンメーカーの海岸女学校の運営に協力していた。

八〇年十二月、津田の案内で小崎が海岸女学校のクリスマス祝会に列席したところ、津田家の親戚岩村家の娘で、事情があつて津田方に寄寓していた千代なる女学生を紹介された。当夜の奏楽や合唱で彼女は生徒の中でも目立つ存在であつた。津田は二人を結婚させようと考えて紹介したのであるから、しきりに千代の人柄を賞賛して交際を勧めた。その後も千代との結婚を勧めてやまないで、小崎はまず人物を調査したうえで決答したいと思い、彼女の学校や友人などに照会した。すると、どの人も彼女を賞賛して、賢明で俠気があり、よく人の世話をして弱者を助け、事を処するに流れるような才幹があり、生徒間に紛争があればいつも調停の役に當つてよく收拾するので、人望は年長者を凌いで隠然小統領の観があるという。小崎は安心してこの縁談を進めることにした。

かくて、翌八一年一月津田家で見合の後しばらく交際し、いよいよ四月縁談成立として学農社の前記岡田松生を使者として結納を納め、六月明石町に新築された海岸女学校で、アメリカ・メソジスト監督教会監督M・C・ハリスと日本

基督一致教会牧師奥野昌綱の司式のもと、津田夫妻を媒酌人として結婚式を挙げた「小崎『1938446』。小崎二五歳、千代一八歳。これが彼らの典型的な見合結婚であつた。

その年の九月、おそらく僚友海老名が湯浅の依頼で、牧師が上洛して留守の安中教会を夫婦同伴で訪ねた。まだ鉄道のない頃であつたから、中仙道を主に馬車で二日かけて安中に着いた。小崎は安中を中心に、安中教会の伝道園であつた原市・松井田・富岡に出張して説教集会をもち、千代は讃美歌指導を担当して常にこれを助けた。小崎たちにはこれが新婚旅行であつた「小崎『193847』」

妻千代（一八六三—一九三九）

岩村家は元旗本の家で、祖父は長崎奉行を勤めたが、父の代で幕府が瓦解したので主家に従つて静岡に移つた。七二年一家は東京に出て、父は一時司法省に出仕したが、蒲柳の質のため千代が二三歳の年に若死にした。千代は静岡から出京すると間もなく津田家に預けられ、津田の娘たちと共に英語を修め、父病死の年に仙が領洗した「ソーパー」から受洗した。

典型的な見合結婚というものの、安中教会への伝道旅

行を当時稀な新婚旅行に擬しているあたり、彼らの結婚生活は新しい芽を含むものであることを予想させる。しかし、その実態を垣間見せる資料に接しないので、夫婦関係についての小崎の一般論と、千代の働きに対する彼晩年の評価を参照することで代えようと思う。

先ず一般論とは、八六年刊行の『政教新論』第六章（儒教用ゆ可らず）と第二章（基督教と文明）で小崎が展開した夫婦関係論であって、すでに五年をへた彼自身の結婚生活の経験と切り離すことができないであろう。彼はいう。

（第六章） 社会開発するに従つて尤も其趣きを異にするものは男女夫婦の関係、家族の制ならん。社会未だ開発せざるや女は男の玩弄物、妻は夫の奴隷にして全く一己人たるの権利あるを見ず。故に婦妻たるは夫に對し貞節を尽すべきの義務あれども夫には妻に對し何の責任あることなく、之を離縁するも之を虐待するも其意のまゝのみ。甚だしきは之を生殺するの權をも有する事あり。同じ人類にして其權利に斯の如きの懸隔ある長嘆息すべきの至ならずや。社会漸く進むや男女同等の位を得、夫婦同格の交を為すに至る。是に於て

始めて男女同様の義務を尽くし夫婦の間に偏重の教なきこととなる。〔小崎 1938:338-339〕

（第二章） 婦人の位置を高尚にし一婦一夫の制を嚴重に守り家族の清潔を保持するは欧米文明の特性なりとす。欧米にて婦人を尊ぶの風あるは独逸人種固有の性質より起れりと為すものあるが、幾分か其理なきにあらざるけれども、此良風を鞏固に為したるは一に基督教の力に由ると謂ふべし。……夫れ基督教の教理にては男女の区別ある唯だ此世限りの者にて永遠に存する者にあらずとす。故に上帝の前に於ては固より同等なる者なり。又夫婦の關係を教るや男女合して一体と成ると云ひ夫婦相扶けて人間の義務を全ふすと為し、婚姻に高尚なる意義を与へたり。〔小崎 1938:375,376〕

社会が開発しない間は夫婦の間に権利義務の甚だしい懸隔があつたが、社会が進むにつれて男女同等の地位をえ、男女同格の交わりをするようになる。これが今日の欧米の夫婦関係であるが、この良風を強固にしたのはキリスト教である。キリスト教は神の前では男女は同等と教え、男女合して一体となり、夫婦相扶けて人間の義務を全うすべし、

と教えるという。要するに、上下的な封建倫理を強調する儒教を去って、現代文明にふさわしいキリスト教に帰することを小崎は勧めるのであるが、問題は同等な人間としての男女が、夫婦としていかに扶けあつて人間の義務を果たしてゆくかの、内容である。これは、小崎が自らの七〇年を回顧した総括のなかで妻千代について語ったつぎの文章に窺うことができる。

私が今日迄信仰を継続し目的に向て生涯を一貫し得たのは全く天佑による事勿論であるが、又妻の内助の功と諸友人の援助とに依る事多いとせねばならぬ。妻は人を見るの明に於て私に勝り、私が人に誤られんとする時屢救はれた事は全く彼の眼識によるものである。又私が災難に遭遇して方針を誤る時、何時も妻は断乎たる態度を以て処すべき道を示し、多くの誘惑と迷路より私を光明に導き、又私が人に誤解され或は事業の困難に依り稍もすれば失望落胆せんとする時、常に私をして天上の光栄を仰ぐ事を得しめ、勇気を恢復して前進し得たのは、彼の外に多くの無名の信徒諸友及其の祈禱と同情とであつた。〔小崎 1938:267〕

上引の文章は、妻の内助と友人の援助を交えて総括しているが、内容からみてほとんどが妻に捧げられた感謝の辞といつてよいであらう。最初の、今日まで信仰を継続し目的に向かつて生涯を一貫しえたというのは、熊本バンド出身の僚友のなかに、横井時雄・金森通倫（一八五七—一九四五）らのように伝道界から政界・実業界あるいは他の宗教へと逸れていった例が稀でなかったことと、自らの人生行路を対比した感慨深い評言である。小崎はその多くを妻の内助の功に負うとして、具体的な場面のさまざまを挙げて感謝したのである。これが、前記にいう夫婦として扶けあいながら牧師の義務を果たしてきた内容である。七〇年の回顧より数年前、小崎の教職就任四〇年を記念して祝賀会が開かれたとき、祝辞を述べた植村正久は千代の内助の功に言及して、「口も八丁手も八丁なる小崎夫人の功労は、良人のそれと共に表彰せらるべき価値優に十分なり」〔植村 1961〕と、第三者の眼から評したなかにも、福音宣布の志に結ばれた同志的同伴型の夫婦関係を認めることができる。

植村の妻季野は、影の形に添うように裏方に徹して夫の事業を助けた。他方、千代は夫の教会の音楽・英語の教師

を務め、幼稚園開設と共に園長となつて夫の事業を助けると共に、矢島楯子の提唱に共鳴して基督教婦人矯風会の設立に尽力し、矢島の後を受け二代目会頭として多年会の発展に尽瘁した。孫の岩村信二が「家を放り出して婦人矯風会や婦人参政権、売春反対運動に奔り廻つた」「岩村」²⁸³とみるのもあながち誇張ではなかつたのだらう。それでも、小崎に上引のように言わたのである。娘時代に小統領と評された彼女の資質が社会運動を推進するなかで磨かれ、夫が評価するようなスケールの大きい内助が可能になつたといふべきであらう。

六、むすび

初期キリスト教リーダーのなかから四名を選んで、彼らの家族形成を配偶者選択と夫婦関係の特性に焦点を当てて考察した。四名はともに一八五四―五八年生まれの戦敗藩もしくは出遅れ藩士族で、明治維新时期に米人教師から英学とキリスト教を学び、一八八〇―八二年の間に二四―二六歳で結婚し、日本キリスト教史に名を留める指導者になつた人々である。出身は会津・江戸・柳河・熊本と東北から

九州にわたるが、身分・年齢・能力・志望・環境などの点で共通点が多く、したがつて彼らの家族形成にも少なからぬ共通点が認められることであらう。

第一に、四例とも井深梶之助の配偶者選択三原則を見事に満たしている¹⁾。

原則 時代相応の教育については、せき子・季野・みや子・千代の四名ともに、当時の先端的な女子教育を担つたミッション・スクールに学んで、外人教師について英学を修め、優秀な成績を挙げた。

原則 キリスト教所屬については、四名ともキリスト信徒であつた。学んだミッション・スクールの所屬教会の關係で、せき子と季野は一致教会（アメリカ・オランダ改革派教会のバラ）、みや子は組合教会（新島）、千代はアメリカ・メソジスト監督教会（ソーパー）と授洗教師の所屬教派は異なるが、三教派ともにプロテスタントに属し、かつ相互に親密に交流していた。夫の所屬教派との異同は、せき子・季野・みや子は同じ、千代のみ異なつたが、結婚により夫側の組合教会に転じた。

と 原則を満たした女性について、原則 自らの判断によつて相手を選んだ。植村のように片想いの恋愛から

出発した場合はもちろん、小崎のように思いがけない紹介から出発した場合でもそうであった。

第二に、井深の三原則以外にも配偶者選択に共通性が認められる。

(1) 女性の属性について、戦敗藩士族の娘（せき子・千代）あるいは出遅れ藩士族の娘（みや子）であるか、教養階層の点でこれに匹敵する地方名望家の娘（季野）であったことである。この点は直接には上記と関わることであるが、四名の男子にとって戦勝藩士族の娘や只の平民の娘よりも相性がよいということであろうか。

(2) 結婚したい相手の女性と顔見知りであっても（海老名）、あるいは相手が見聞の範囲の女性であっても（植村）、直接交渉はせず、適切な仲介者を立てて意向を打診した。

第三に、夫婦関係にみる共通性としては、夫の社会的役割の遂行を核とした伝統的な夫唱婦随型⁽²⁾ではあるものの、夫婦相携えて神に従う同志的同伴型⁽²⁾というべき新しい形態が、多少の濃淡差をもって創成されている。これは脱剝奪の視点では論じえない価値の実現⁽²⁾といってよいだろう。

以上四事例から抽出した共通性は、初期キリスト教リーダーの相当部分を代表しているのではないだろうか。とい

うのは、第一に指摘した配偶者選択にみる共通性の背景に、新しい教育を受けた若い男女の、キリスト教的環境での社交圏の萌芽が暗示されており、第三に指摘した夫婦関係にみる共通性は、教会という形でのキリスト教的コミュニケーション形成の核になるとともに、またこれによって支えられたからである。

註

- (1) 高崎藩士の子で無教会主義キリスト教の創唱者となった内村鑑三（一八六一—一九三〇）の場合も、初婚相手の安中藩士の娘浅田タケは、内村が一八八三年夏安中教会を訪れて相愛となった仲であり、同志社女学校に学び、安中教会最初の受洗者の一人であったから、井深の三原則を満たしていたが、当時の内村の包容力の不足により、結婚一年をへずして破婚となった「小原 1976:66、飯岡 1988:147-166」したがって、後年キリスト教界の指導者となった人物が、配偶者選択において三原則を満たしても、必ずしも本稿の四名のような結婚を実現できたわけでない。にもかかわらず、彼らの間での同志的同伴型夫婦関係の登場は、キリスト教受容を契機とする新しい価値を担った共同体の登場として注目し値するのである。なお、武田「1959:28-32」を参照せよ。
- (2) 同伴型とは、行動次元および（あるいは）情緒次元での伴

侶性 companionship を特色とする夫婦関係パターンであって、そのうち夫婦が同質の価値欲求をもつ場合、同志的同伴型とよぶ〔森岡ほか 1997:116, 137〕

一八七七年（明治一〇）井深・植村とともに東京一致神学校に学び、七九年末彼らと同日に日本一致教会の教師の按手礼を受けた旧幕臣の子・田村直臣（一八五八—一九三四）は、在米中の九三年に *The Japanese Bride*（『日本の花嫁』）という本を出版した。彼はこの本のなかで、日本では、結婚は愛によるのではなく家系を継ぐために重要であること、女性はい供のころから男性よりも劣っていると教えこまれ、異性と交際する機会もなく親が決めた結婚をし、父親の所有物から夫の所有物に移ること、絶対君主国の国民と同様に女性には夫への絶対的服従を要求されること、夫が芸者や他の女性とどのような不道德な関係を結んでも抗議できず、笑顔で忍耐しなくてはならぬこと、服従は美德で、夫や姑への不服従は直ちに離婚を意味すること、夫は思うままに離婚できるが妻に何の権利もないことを論じ、キリスト教によらねば真正の愛を味わうことができないと結論した。国家主義的傾向が強まった当時の日本のジャーナリズムがこの本を日本の恥さらしとして、田村を袋叩きにしたのは怪しむに足りないが、キリスト教界もこれをきびしく批判した。植村の『福音新報』（第127号）がまず反対の烽火を揚げ、九四年の日本基督教大会で井深が告訴委員長となつて教職剝奪の動議が可決されたことは、彼らの結婚観を知る者には理解しがたい事件であつた。

『福音新報』は、田村が中以下の野卑な社会の習慣を日本社会一般の習慣のように描写して、日本の恥を外国人の笑い草に供した軽薄な行為を批判し、井深の告訴は、日本には良い習慣もあるのにそれを挙げず、日本の恥辱になることを軽佻な表現で外国人に知らせて日本国民を侮辱し、キリスト教伝道を非常な困難に直面させたと言ふ。田村の『日本の花嫁』を拒否しただけでなく、彼を日本基督教会から除名するという植村・井深らの「極端に行き過ぎた」行動を、武田清子は、外国人に日本の恥を見せたくない、日本文化のすべてを否定するような立場は断じて取りたくないという、彼らのナショナリスティックな動機と、日本に移植されたばかりのキリスト教会を外部の偏狭なナショナリズムの風圧でつぶされないように守り、育てていこうとした彼らの教会形成の戦略を想定することによって、説明しようとした〔武田 2001:24-28〕。私はそれに加えて、『日本の花嫁』が描いた家庭像とは全く異なる同志的同伴型の夫婦関係を基礎とする家庭が創造される自信めいた希望を、彼ら自身の家族形成の経験から掴んでいたことが、彼らの行動の背景にあつたと想定されることを強調したい。

文献

海老名弾正、1937、「我が信教の由来と経過」海老名一雄（非売品）。

井深梶之助とその時代刊行委員会編、1988『井深梶之助とその

時代』一巻、明治学院。

井深梶之助とその時代刊行委員会編、1970『井深梶之助とその時代』二巻、明治学院。

飯岡秀夫、1988『内村鑑三の思想形成と上州』高崎経済大学附属蚕業研究所編『近代群馬の思想群像』貝出版企画、199-206。

岩村信一、1982『日本の夫婦』Y M C A 出版。

小原 信、1976『評伝・内村鑑三』中公叢書。

小崎弘道、1938『自叙傳』（小崎全集三巻）、警醒社内小崎全集刊行会。

小沢三郎、1959『近代日本におけるキリスト者の結婚 植村正久を中心として』新教出版社『福音と世界』14巻4号、50-53。

森岡清美、1975『イエスに従いし明治の女性』笠原一男編『近代女性の栄光と悲劇（日本女性史6）』評論社、281-321。

森岡清美、2004『明治前期における土族とキリスト教』『淑徳大学社会学部研究紀要』38、125-169。

森岡清美・望月嵩、1997『新しい家族社会学』培風館。（四訂版）

佐波 亘、1937『植村正久と其の時代』一巻、教文館。

佐波 亘、1943『植村正久夫人 季野がこども』教文館。

武田清子、1959『人間観の相剋 近代日本の思想とキリスト教』弘文堂。

武田清子、2001『植村正久 その思想史的考察』教文館。

植村正久、1919『小崎弘道氏就職四〇年』『福音新報』1273号。

植村正久、1934『植村全集』八巻、植村全集刊行会。

植村 環、1966『父母とわれら』新教出版社。（新教新書）

渡瀬常吉、1938『海老名弾正先生』竜吟社。